

【学術論文】

犀星日記における原稿料

― 出版文化の基礎的研究・その一 ―

谷 口 幸 代

要旨 大正七年自費出版の『愛の詩集』、『抒情小曲集』が認められ、室生犀星は詩壇に登場した。そして長い放浪生活から抜け出て、東京に居を構える。新進詩人はその翌年に「中央公論」に投稿した『幼年時代』など三作が認められ、一躍、文壇に登場した。以後、詩、俳句、短歌、小説、随筆、童話と、多岐にわたる足跡を残すことになる。

その犀星の十五冊の日記は現在、新潮社版の全集別巻一、二に収められている。日記には原稿料や印税がそのつど丹念に書き込まれており、昭和時代の一部には原稿料を受取るまでの経過や交渉の事情まで書き留めているものもある。この原稿料授受の記録を注解しながら、筆一本の売文生活の実態と文士氣質を明らかにすることが、小稿の目的である。

犀星が文壇に登場した大正時代は、新聞の発行部数が飛躍的に増え、雑誌界では各種の女性誌が次々に創刊され、原稿料が飛躍的に上がった時である。総合雑誌の「中央公論」と「改造」というライバル雑誌での犀星の評価は原稿料ではかることができるほどである。

昭和時代は円本ブームで始まり、戦時中に戦費調達のため源泉徴収制度が施

行され、昭和二十年代は、敗戦直後の物資不足と激しいインフレによる原稿料の急騰、新円発行の金融緊急措置令による不況のため、支払いの遅延や未払いの様が書き込まれている。

昭和三十年代の週刊誌ブームの頃、創刊間もない「週刊新潮」の目玉だった谷崎潤一郎『鴨東綺譚』がモデル問題で中絶した時、ピンチヒッターとして立ったのが犀星だった。円地文子「原稿を書くことは文学者の生命なのだから、それによつて得る報酬もなおざりに考えてはいけないというお考えだった」と回想する。

キーワード：原稿料、印税、メディア、出版文化

一 日記の検討に入る前に

『室生犀星全集』別巻（昭四一・五、四三・一、新潮社）には十五冊の日記が収められている。所々に欠けている時期があるが、大正十三年から昭和六年、同二十三年から三十一年の長期にわたって書かれたものである（一）。長女朝子の「思いがけなかつた日記」（『室生犀星全集月報』九、昭四一・五）によれば、それらの入った包みは毎年軽井沢に出掛け、前に留守を預かる娘に託されたという。犀星が比較的厳しい表情で言い聞かせた緊急時の注意は、まず病床の妻を門外に運び、それから「この風呂敷包だけを決して忘れないように、あとのものは皆焼けてしまつてもよい」とのことだった。几帳面に結び目の他には一本の無

駄な数もない包の中身は原稿だと説明された。日記だったと判明するのは犀星の死後のことである。それらを読んだ朝子は父が「仕事をすると同じ気持ちで、自分の日記に相向つていたこと」を初めて知る。

これらの日記に深い理解を示したのが中野重治だった。新潮社版十四巻本『室生犀星全集』全巻の解説を担当した彼は、別巻一では「日記の犀星」と題して犀星日記の特質と意味を解き明かした。すなわち、「個人の記録として、また時代の個人への反映として、またこの人の全文学の注解として特別の意味」をもち、「独得の観察、独得の表現を通して、ちよつと類例のないある個人の文学的描出」でもあると評価する。重治は、関東大震災後の金沢での暮らしが犀星の自然観察に深さと強さを与えたと述べるとともに、戦中から敗戦後に続いた軽井沢生活で観察された当地の人々の姿の「リアル」さや、「戦犯」に関する記述にも注目する。それらの記録には感覚と表現の双方の面で「犀星的」なるものが表れているとし、だから犀星の日記は「犀星文学の芸術」としてあるべきものだと言論した。

このような日記を改めて検討するにあたり、小稿では犀星の「物質的基礎」②をめぐり記録を取上げる。日記には依頼から執筆、原稿の手交や郵送、原稿料や印税の授受にいたるまで丹念に書き込まれている。重治はこうした面には言及していないが、それらの記録にも極めて「犀星的」なものを見出すことができる。犀星は日記とは「金銭出納簿でも来往者の帳面」でもなく、「生きた心の覚えがき」が、なまなましく記述されるはずのもの」(『書かれざる日記』「朝日新聞」等、昭

二八・一二〇)だと述べている。とすれば、原稿料、印税の記録も犀星の「生きた心の覚えがき」として欠くことのできない要素であるはずだ。犀星は報酬を記録するという日々の行為を通して、「売文の徒」③としての自己を客観的にみつめながら創作を続けたのだ。

残された犀星日記は、書かれた時期の問題で、残念ながら、『幼年時代』(『中央公論』大八・八)での登場前後、『あにいもうと』(『文芸春秋』昭九・七)での復活、『杏っ子』(『東京新聞』夕刊、昭三・一一・一九(三三・八・一八)での最晩年の輝き、という華々しい活躍を見せた各時期の実態を確かめる直接的な資料とすることはできない。しかし、犀星日記の検討は、犀星と原稿料・印税をめぐる諸問題を明らかにするために不可欠な基礎的研究となる。言うまでもないことだが、島崎藤村や佐藤春夫といった詩から小説へ転じた文学者たちとは異なり、犀星は小説を書き始めた後も詩を書いた。また生涯に約千八百の句を残した俳人魚眠洞でもあった。したがって、犀星の原稿料・印税を考察することは、詩、小説、俳句、随筆など複数の分野を横断する稀有な事例を浮かび上がらせることになる。

日記では省略されている事柄も多く、個々の記録が何をさすものか不明な場合も少なくないが、室生朝子他編『室生犀星文学年譜』(昭五七・一〇、明治書院)との照合や初出誌の調査等から、可能な限り裏づけと推定の作業につとめた。その上で犀星日記を大正末期から昭和初期、昭和二十年代、三十年代と三つの時期に分け、出版界での評価の目安となる原稿用紙一枚あたりの額に注目しながら原稿料授受の記

録を注解する。そこから犀星の売文生活の実態と文士気質の一端とを明らかにしたい。

予め現存する日記以前の犀星の「物質的基礎」を自伝的小説等から整理したい。それは犀星が売文家になった過程を追うことでもある。まず明治三十五年に高等小学校を退学し金沢地方裁判所の給士となる。この時の初任給が二円五十銭だった。金石の登記所に移り月給六円となり、ついで八円となり、「みくに新聞」、「石川新聞」では月給が各十二円だった。上京後は東京地方裁判所の写字を一日に最高で三十八枚こなした。一枚あたりの報酬は『弄獅子』に一銭五里、『泥雀の歌』（『新女苑』昭一六・五・一七・二）に五銭とある。この間、医学雑誌の詩の代作料を一月で五円受取る。

大正四年には詩の原稿料として、「文章世界」から二円五十銭、高岡で発行されていた「月見草」から十円⁽⁴⁾を得る。前者については、正宗白鳥の「早稲田文学」の原稿料が約七十銭、島崎藤村の「中央公論」の原稿料が一円だと聞いたと当時の状況に言及しながら、「原稿紙が三枚くらいであつたから一枚壹円近くの割合で、その当時として相当な原稿料であるらしかった（『泥雀の歌』）と回想している。しかし、新保千代子『室生犀星』（昭三七・二、角川書店）によると、この年に交際相手が翻意した背景には「せめて月三十円儲けてくれば」と犀星の経済状況を問題視する女性側の家族の意向があつたという。

その後、自費出版した『愛の詩集』（大七・一、感情詩社）の売捌店文武堂より売上の一部を小切手で貰う。額は『弄獅子』に百八十円、『泥

雀の歌』には二百円とある。『新しき詩とその作り方』（大七・四、文武堂）の原稿料は、『弄獅子』で八十円、『泥雀の歌』で約六十円だったとされている。大正八年は、『抒情詩時代』を「文章世界」の加能作次郎に送り、五月号に掲載されて一枚五十銭の原稿料を得た。

同年の六月十日頃、『幼年時代』の原稿と履歴書代わりの『愛の詩集』を添えて「中央公論」の滝田樗蔭に小包で送る。当時、樗蔭が作家のもとを訪れる際に使った人力車は、文壇での地位を約束するものとして無名作家の憧れの的だった。しかし、『幼年時代』の掲載はその人力車での依頼でも、大家からの推挙によるものでもなかった⁽⁵⁾。持込原稿に宇野千代の例があるが⁽⁶⁾、『幼年時代』は投稿だった。文壇登場以前の犀星は「文章世界」や「新声」に投書して発表舞台を切り拓いたが、「中央公論」にも俳句を投稿して採用されたことがあり、この場合も同じ投稿という形をとったのだろうか。『私の履歴書』（日本経済新聞）昭三六・一一・一三（二・七）では「滝田樗蔭という編輯者に直接送り付けて一遍に勝負をつけたかった」と表現している。

送られた原稿は、同誌編集者の木佐木勝の『木佐木日記』第一巻（昭五一・四、現代史出版会）によれば、樗蔭の机に仕舞われたままになっていたが、犀星の催促を受けて樗蔭が読み、才能を見出すことになったという。この督促の件は『泥雀の歌』や『私の履歴書』には取上げられず、七月号に掲載されていないのを見て諦めた矢先の七月十日に突然、「小僧さん」が校正刷を持参して、採用を知ると劇的な展開となっている。月末にその「小僧さん」が五円紙幣で届けたのが、原稿

用紙一枚につき一円、計九十四円の原稿料だった。犀星は『私の履歴書』で「大正八年代の一枚一円は最高の原稿料で、島崎藤村なみの稿料であり、それも『中央公論』だけが各作家に支払っていた原稿料であつた」と回想する。

翌月には樗蔭本人の訪問を受けて続稿を依頼され、『性に眼覚める頃』以降の発表が果たされた。読者に与える衝撃の大きさをねらつて当初の題名「発生」を「性に眼覚める頃」と改題したのも樗蔭だった⁷⁾。犀星は「中央公論」の原稿料の推移を『泥雀の歌』で次のように描く。

(前略) 私が『中央公論』に書いた「幼年時代」の原稿料が最初に一枚壹円であり、いまから二十二年前の大正八年八月であつた。

十月号に「性に眼覚める頃」を書いたときに壹円五拾銭になり、十一月号に「或る少女の死まで」を書いて貳円になり、その翌年の大正九年の二月号に「結婚者の手記」を書いて貳円五拾銭になり、四月号に「美しい氷河」を書いて参円になつた。

同じ頃に「文章世界」から依頼されて『一冊のバイブル』(大八・九)を発表するが、一枚七十銭で、『抒情詩時代』からの上げ幅が二十銭だったことと比較すれば、『中央公論』の評価は桁違いであつたことがわかる。また樗蔭との関係を綴つた『滝田樗蔭』(『刈藻』昭三三・二、清和書院)には、『浅尾』(大正一〇・六)等三篇より一枚三円五十銭にあつて計百五十七円五十銭を支払う旨を伝える樗蔭の書簡が引かれている。支払いも、原稿を渡した翌日に他の記者が人力車で届けるなど速やかに行われたという⁸⁾。こうした同一の雑誌の立続けの起用、し

かも初めは作品ごとに原稿料の額が引き上げられ、速やかに届けられる、この異例の処遇の背後には、新たな才能を開花させようとする樗蔭の意図があつたと思われる。

しかし、当時の活躍ぶりは、いっぽうで樗蔭から濫作だと注意を受けるほどだった。『泥雀の歌』では『幼年時代』から半年しか経っていないにも関わらず、大正九年三月号だけでも『地下室と老人』(『新潮』三十枚や『泥濘の街裏にて』(『文章世界』四十五枚など二百八十五枚を書いたと自嘲する。現存する日記は、こうした状況を経た大正十三年から始まつていることをまず確かめておきたい。

二 大正十三年から昭和六年まで

「婦人之友」の三上秀吉「立琴をかきならす女人群」(『室生犀星全集月報』五、昭四〇・四)は、犀星が三十五、六歳当時、つまり大正十三、四年頃には既に原稿料の支払いの期日に厳しかつたので、できるだけ早く届けるようにしたと述べている。たしかにこの証言を裏付けるように、大正十三年の日記には、『高麗の花』(大一三・九、新潮社)のことが、印税が検印後二週間を過ぎても届かないので請求したり(十月十五日)、後日勘違いだとわかつたものの、報知社から届いた原稿料が少ないので原稿の返却を申し出たりしたこと(九月二十六日)が記されている。またこれとは逆に雑誌「女性」から届いた原稿料が多すぎたので、その旨連絡したともある(七月二十七日)。

しかし、『室生犀星文学年譜』に整理された発表作品数と照らし合わせる、大正十三年の日記の記録は限られたものに過ぎないとわかる。したがって、この問題への意識はすでに犀星の中に備わっていたが、それを日記に記すことは徹底されていなかったといえる。

その中でも、小説家犀星の出発点となった「中央公論」からの原稿料については、三回記録されている。すなわち、「中央公論より三百九十六円稿料送り来る。」(①、三月二十一日)、「中央公論より四百九十二円」(②、四月十四日)、「中央公論より原稿料来る。七三二、」(③、八月二十九日)とある。①は随筆『川魚の記』(七月号)の原稿料と推定され、この随筆は四百字詰原稿用紙で約六十六枚であるから、一枚あたりに換算すると六円となる。同様に②は『忘春述懷』(六月号)、③は『人世』(十一月号)をさし、これら二篇の小説のどちらも一枚あたり六円となる。

「中央公論」が大正八年から十年にかけて犀星に支払った原稿料の推移について前節でふれたが、その後さらに上がり、大正十三年には小説、随筆の別なく六円が支払われていたのだ。これは、前掲の『木佐木日記』に大正十三、四年頃の同誌の原稿料は六円から八円だったとあるのに合致する。

木佐木は「改造」との対抗意識から両雑誌間で原稿料の引きあげ競争が起ったとも述べている。「改造」からの原稿料について、大正十三年の犀星日記には、「改造社より百参円五十銭来る」(二月二十七日)、「改造より百参拾五円」(九月二十二日)とある。前者は『北国花暦』

(三月号)、後者は『碓氷山上之月』(十月号)の原稿料と推測され、一枚あたりはどちらの随筆も約四円五十銭となる。「改造」は大正九年四月号の『蒼ざめた人と車』で初めて犀星の小説を掲載し、同十一年は新年号に『冬夜に』を載せるといいうように、「中央公論」を追いかけるように犀星を迎えたが、少なくとも随筆の場合、原稿料の額は抑えられていたようだ。

さらに木佐木は、婦人雑誌の原稿料は別格で総合雑誌の三、四倍の額だったと述べており、佐藤春夫らも同様の発言を行っている^⑨が、犀星の場合は事情が異なっていたようだ。日記をもとに確かめられる範囲では、一枚四円から九円弱の間で執筆している。最も高額が「主婦之友」で、大正十三年四月十四日に同誌から三百五十円を受取ったとある。これは『女客』(七月号)四十枚の原稿料と考えられ、一枚あたり約八円七十五銭となる。この他、「婦人画報」は約四円六十銭、「婦人之友」「女性改造」は四円と推定できる^⑩。同じ女性誌でも一枚あたりの原稿料には倍の開きがあるが、この時の犀星は女性誌から別格といえるような原稿料を得てはいなかったようだ。

その後の日記では、大正十三年十月以降、原稿料の額に関する具体的な記録が一旦途絶える。昭和四年に入り再び記録されるようになり、翌五年は日記自体が残されていないが、六年の日記でも継続される。全ての収入を網羅してはいないが、詩、俳句、小説、随筆の原稿料から選料、印税まで各種の収入が記され、几帳面な記録はこの頃から始まったといえる。

昭和六年の日記ではより詳細な記録となり、「改造」小説稿料二百六十三円来る。四十四枚分。」(二月二十二日)、「週刊朝日」処女稿料百九十八円落手。三十三枚分。」(四月二十八日)というように、金額だけでなく作品の枚数も明記される例が現れる。こうした変化は、自分の筆が生み出す報酬を記録という行為を通して再確認し、売文家としての自己をみつめようとする意識が、犀星の中で大きくなったことを示すのではないか。

ジャンルごとに具体的な事例を挙げてみよう。まず詩では昭和四年に「アルト」から十円、「若草」から二十九円を得たとある⁽¹⁾。昭和六年に「婦人倶楽部の詩の稿料二十円とどく。母と題する一篇。」(三月二十五日)とあるのは、「母びと」(五月号)のことだろう。当時の犀星詩の原稿料は一篇五円から二十円まで幅があるようだ。のちに犀星は「詩」の原稿料「(小説新潮」昭三六・六)で、詩一篇の原稿料について、三十歳頃に約五円、三十五歳頃に二十円をとった、そして戦前の最も「高率」は「婦人公論」の四十円だったと回想している。またこれに関連して、新潮社の植崎勲は「作家の舞台裏——編集者のみた昭和文壇史——」(昭四五・一一、読売新聞社)で、萩原朔太郎「青猫を書いた頃」(昭一一・六)当時の「新潮」では、犀星で約十二円、新人立原道造で約六円だったと証言し、三好達治が詩を買ってほしいというので、「せいぜい一編十円」と説明すると「そんなにやすいのならいやだ」(傍点原文)と言ったという挿話を引く。

俳句では「婦人之友」より「花桐や幟はためく日もすがら」の原稿

料五円を得⁽²⁾、「発句をもつて稿料を得しこと度々なれど、何か気の毒の感を持つ」と書き添えている(昭和四年四月二十一日)。この額は後述のように当時の犀星には散文一枚の原稿料に当たるが、額の多寡ではなく、俳句で原稿料を得ること自体を「気の毒」と感じている。

いっぽう小説では、「文芸春秋」から昭和四年二月七日に内金五十円を受取った後、同月二十七日に百八十円を得たとあり、都合二百三十円が支払われている。これは『餓鬼』(同年三月号)の原稿料と推測され、約三十六枚の分量から換算して一枚あたりの額は、俳句一句で得たのと同じ五円となる。昭和六年には「新潮」から『コナ・ダイヤ』(五月号)で二百十円が支払われた(二月十六日)とある他、前掲したように「改造」から『自殺』(三月号)と推定できる四十四枚分二百六十三円、「週刊朝日」から『処女』(七月一日号)三十三枚分百九十八円が届いた。以上から一枚あたりの単価は、「新潮」「改造」「週刊朝日」とも六円となる。同様に随筆の一枚の原稿料は、「文章倶楽部」『若草』『新潮』が各四円、「改造」が四円五十銭、「中央公論」が六円と推定できる⁽³⁾。

以上から、「中央公論」が大正末期から随筆、小説の別なく一律に六円を犀星に支払ってきたと考えられるのに対し、「若草」や「新潮」では小説と随筆で差をもうけていたことになる。前掲の『作家の舞台裏』にも、「新潮」の原稿料の最高額は、谷崎潤一郎の『続羅洞先生』(昭三五)の一枚十円は別格として、徳田秋声の小説で一枚七円、感想、評論は五円だったとある。

のちに犀星は「文学者とは」（前掲）の中で、佐藤春夫とともに当時の原稿料を振り返っている。佐藤は「震災前は十円後は十五円もらったような記憶がある。しかし婦人雑誌などはもつと高くて、三十円か五十円」だったとし、それに対して犀星は「十五円というのは稀のことだ。ほうが震災のときは六円だったかな」と発言している。この六円とは、具体的事例からの検討に基づけば、まずは「中央公論」から得ていた額であり、ついでそれに追いつく形で「改造」や「新潮」から小説に支払われるようになった額だった⁽¹⁴⁾。

三 昭和二十年代

昭和二十年代の日記は二十三年以降中断なくまとまった形で残されている。これは、たとえば昭和二十年十二月に六円だった米十キロの小売価格が翌年三月に十九円五十銭、同じ年の十一月に三十六円三十五銭、二十二年十一月に百四十九円六十銭に急騰したような⁽¹⁵⁾戦後の異常な悪性インフレの最中に書かれたものである。昭和二十一年に発令された金融緊急措置令、それに基づく旧円から新円への切り替え、預金封鎖など目まぐるしい経済状況を背景に、前節で取上げた昭和初期までの日記よりさらに事細かな記録が行われている。原稿料の値上がり、不況による原稿料や印税の支払いの遅延や未払いに関する記録が臨場感をもって書き込まれ、また戦費調達のために昭和十五年から施行された源泉徴収制度を意識し、税抜きでの支払いを求める

など、いわば著作者の視点からの原稿料の克明な歴史となっている。まず小説の原稿料の記録は、二十三年三月三十日に「新潮」から二年ぶりの依頼を受けたと記すことから始まる。「稿料幾らかといへば二百円ではどうかといふ、他の方の振合ひもあれば三百円と言つて置く」とあり、当時の犀星が小説は一枚三百円を基準に執筆していたことが窺える。その頃の小説の原稿料について、大久保房男『終戦後文壇見聞記』（平一八・五、紅書房）は、丹羽文雄の『哭壁』（群像）二二・一〇（二三・一二）の初回は一枚百五十円だったが、最終回では八百円になったと実例を挙げる。犀星の場合は敗戦直後の日記が残されていないため、この時期の上昇の幅を明らかにできないが、二十三年時の犀星が基準とした三百円という額は当然この高騰の影響を受けたものだったと考えられる。

犀星の小説に支払われた一枚あたりの原稿料がその後どう推移したのかを追うと、二十三年のうちに六百円になり、二十四年に千円、二十六年に千五百円となった⁽¹⁶⁾。二十七、八年頃はこの千五百円という額を基準に「中公公論」「新潮」「文学界」の各誌と執筆交渉を行っている⁽¹⁷⁾。さらに二十九年には、「小説新潮」から二千円、「文芸春秋」から二千三百円、「婦人朝日」から二千五百円が支払われている⁽¹⁸⁾。犀星はこうした上昇を、一枚あたりの額に換算したり、他誌との比較に言及したりしながら几帳面に記録している。猛烈なインフレの最中に行われた、佐藤春夫、正宗白鳥との鼎談「作家の世界」（「群像」昭和二三・二）では、佐藤が物価の急騰で様々な物の値が十倍になったが

原稿料はまだだと発言したのに対し、「十倍になつたら大へんだ。さうなるとまた恥かしいし、何だか闇屋みたいな気がしてね」と応えている。原稿料というものを客観的に見据えようとするまなざしは、日記の中では次のように作品との関係を表現させる。

原稿料といふものは作家の秘密であるとすれば、さういふ意味にもなるが、稿料のたかいやすいによつて作家の或る程度きまりが付くことは争へない。通俗物で二三千円取つてゐる人は、それだけの面白さと名前が売れるので、作品自体の値ではない、さうなると、たかいやすいものになるものではないのだ。ほどよいところで恥かしくない率の原稿料を取つて居ればいいのであらう。千五百円から二千円くらゐなら、それでよしとすべきではないか。

(二十七年三月二十九日)

随筆の原稿料の場合も同様の姿勢が見出せる。昭和二十四年三月十七日に「東京日日新聞」から届いた四千八十円は、当時の犀星の随筆に対する原稿料では最高額だったが、「詩は一枚千円であるが、雑文の稿料八百円ははじめてである」と沈着な筆致で記されている。これは同年三月十九日に掲載された『ばやを拾う人』のことだろう(『室生犀星文学年譜』未掲載)。その後の記録を追つても、「東京新聞から稿料八千円(税込)とどく、一枚二千円の割、随筆では最高の稿料である」(二十七年四月二十九日)、「朝日新聞から稿料一万二千五百円(税千八百七十五円)到着、一枚二千五百円の割であり随筆稿料の最高である」(二十八年二月二十二日)と、各紙からの原稿料がその時々の随筆

の最高額であることを淡々と記している。前者は『作家は一生が青春時代』(昭二七・四・一五)、後者は『書かれざる日記』(昭二八・一二・二〇)のことだろう。この点に関し、「読売新聞」を経て新聞三社連合に移つた三宅正太郎の「軽井沢訪問記」(『室生犀星作品集月報』五、昭三四・四)を参照すると、二十九年八月に犀星を訪れた際に、「新潮も中央公論も税込一・五〇〇円で、文春が最近一・八〇〇円に上げた。新聞が一番よくて随筆でも二・〇〇〇円。」と、各誌の原稿料の動向とともに新聞の原稿料の高さが話題になったと回想されている。

いっぽう詩の場合は、昭和二十三年四月九日、「文芸春秋」より詩一篇の稿料千円送り来る。七行しかない。つひに詩も千円になりしか。」と記す。同誌四月号掲載の「古庭」のことだろう。実際は八行だったが、十行に満たない詩に千円が支払われたことに率直な驚きが表示されている。翌二十四年四月十五日に「文芸春秋」詩稿料六千円とどく。詩一篇三千円に相当してゐるが、恐らくこれが詩の最高の稿料ではなからうか、徳田君の計ひも含んでゐるが、僕の詩稿料としては初めてである。五月七日に「新女苑」詩稿料五千円とどく、一篇五千円は初めてである。一行五百円に当る。」と続き、後者では行数換算も行つてゐる⁽¹⁹⁾。これらを受けて、この年の十月十五日に「詩の稿料はまぢまちに取つてゐるが、五千円に決めることにした」と、この額を基準にすることを決断している。

昭和二十六年八月二十九日には「文芸春秋」の詩の稿料一万円とどく。これは詩の最高の稿料である。」とある。ついで同年十二月

三十日に次のような述懐がなされる⁽²⁰⁾。

詩が一万円も稿料が支払はれることは、何度目かであるが、これから詩の稿料もしぜんに此のあたりに決まるのであらう。金にならない詩を少年時代から書きためて喜んでゐたものが、ともかくも一万円になったことは笑ひごとではなく、ふしぎな面白い酬いなのである。雑誌にのせてくれといつても、掲せられないやうな奴が短かい詩をかき、はじめにはたらいでゐる人の一ヶ月分の給料を一篇で取つてしまふことにも、やはり謙遜の情が加へられるべきである。十万円取つても高くはないが、己れの往時をかへり見て、頭を澄ましてへり下つて見ても、そんなに不調和なものではない、(後略)

前述したような物価状況からすれば、原稿料が上がったからといって、詩作で生計が成り立つようになったわけではない。それでも詩に対する報酬の低さを感じ続けてきた犀星にとって、繰返し感嘆せずにはいられない劇的な変化だったのではないか。

こうした状況を経て、昭和二十九年十月二十七日、「地球の良日」(「新潮」十二月号)の原稿料について、「『新潮』が詩の稿料に一万円払つたのははじめてであるが、文芸雑誌にも詩に高い稿料を払ふやうになつたことは、詩のために喜ばしいことである」と記す。「『新潮』との関係は無名時代に前身の「新声」の詩壇に投稿して以来のもので、「親戚つきあひ」(「輝やかなしい歴史」同誌、昭三〇・四)のようなものだった。犀星はその「『新潮』が総合雑誌や女性誌に続いて詩に原稿料で報いる

ようになったことに意義を見出している。

俳句に目を転じると、昭和二十三年に「女性ライフ」から六百八十円が届いたとある(五月二十二日)。同年八月号に「夏日行」との題で五句が掲載されている(『室生犀星文学年譜』未掲載)。またほぼ同時期に「小説新潮」から「わが家のならひ」五句(九月号)に対して八百五十円が支払われた(八月十四日)。千円を要求したところ税を引いて届いた額だとあり、当時、詩一篇で得ていた千円が目安とされたのかもしれない。その後、二十九年に「夏めける」六句(「文芸春秋」昭二九・七)に一万円(内税千五百円)が支払われた際には、「俳句一句が二千円に当る訳なり」(同年五月十九日)と記している。

昭和二十年代の犀星日記には、このような原稿料の推移とともに、その支払いの遅延や不払いの様が記されている。原稿料の回収難に悩む作家のために取立代理業まで出現した時勢だった⁽²¹⁾。二十三年九月から十月にかけて、「新生」の原稿料をめぐる騒動とその顛末が記されている。『巷に飼はる』の原稿を送ったのが九月二十二日だったが、半月経つても原稿料が届かないことに業を煮やし督促すると、「会計でもだめだ、社長でないと要領をえない」と編集者から返事が届く。そこで原稿を取り戻そうと打電し、滞在先の軽井沢から息子を差向けると、二万円のうち千円のみを渡されて帰ってくる。原稿はすでに印刷所に回された後だったという。犀星は即刻速達で返金する。結局、原稿が戻ったのは十一月に入ってからだった。

昭和二十年九月に青山虎之助が創業した新生社は、二十一年に全盛

期を迎えた後、二十四年に経営難から千五百万円の赤字と二百三十万の税金滞納額を残して閉鎖した。同社は原稿料の高さで知られ、昭和二十年に「新生」創刊号への寄稿依頼を受けた荷風は一枚百円から二百円と聞いて、『断腸亭日乗』に「物価の暴騰文筆に及ぶ、笑ふ可きなり」と書いていた⁽²²⁾。一時は十七万部五千部を売上げたという同誌は昭和二十三年十月号をもって廃刊となった。『巷に飼はる』は、この「新生」廃刊前後の混乱の渦に巻き込まれたのだった。漸く原稿を取り戻した犀星は、その日の日記に「原稿生活の不安定といふものも、永い経験から分つてゐても、全くこいつくらゐいやなものはない、作家の気をくさらせるものも原稿料のいきさつが混淆するときである」(十一月十一日)と書き記している。

『巷に飼はる』は新生社社員の仲介で「自由公論」(昭二四・一)に掲載され、前年に政治雑誌として創刊された同誌初の小説となった。原稿料は一枚五百五十円だった(二十三年十一月十三日日記)。日記には、他誌への転売という点では、「小説がかういふふうにならざる商品あつかひにされることは不愉快である」が、原稿料が当初の予定より「せり上つた」点では、「原稿も商品と変りがない、別に不愉快な気がしないのは変である」と書かれている。これが悪性インフレと出版不況下に生きる作家犀星の偽らざる本音であった。

四 『随筆女ひと』以降

昭和三十年、犀星は「新潮」新年号から六月号にかけて『随筆女ひと』を連載した。これにより『幼年時代』の第一期、『あにいもうと』の第二期に続く、第三の活躍期が始まる。

この随筆の成立の過程を日記に求めると、前年の十月十七日に同誌の編集者、小島喜久江(千加子)が原稿の依頼で訪れている。小島の『作家の風景』(平二・六、毎日新聞社)によると、「女に関する連載エッセーを」というのが編集長斎藤十一の構想だった。十一月二十日に初回分の原稿が渡され、二十九日に原稿料が届けられた。「連載随筆稿料税込三万円持参、一枚千五百円、小説と同額」と書かれている。小説と同額が支払われたことに「新潮」の期待の大きさが示されている⁽²³⁾。

これ以降も、十二月二十日に原稿手交、同月二十四日に原稿料三万円(税込)到着、翌年一月二十日に原稿手交、同月二十五日に二万五千五百円到着、三月二十三日に原稿手交、同月二十六日に三万円(税込)到着、四月二十日に原稿手交、同月二十八日に同額到着、五月二十日に最終回を手交、同月二十六日に二万五千円が到着、と書き手も出版社側も律儀な足跡を残している⁽²⁴⁾。

この随筆は同年十月に新潮社より定価百八十円で発行された。初版発行部数は一万部で、犀星は「こんな大量の部数が出版元で刷られたことは、いままでに一度もなかった。なんとかして売ってくれればいいと思つてゐる」(十月十日)と日記に記した。その後の日記をたどると、増版の検印紙三千部が届いたのは、月も替わらない二十五日だった。三日後の二十八日にはさらに二千部の検印が届く。十一月七日は

担当編集者の谷田昌平から好調な売行きの報告を受けた。同月十七日には増版七千部の申入れがあり、累計二万二千部という刷数に「こんな大量に売れたことは、近年はじめてである」と驚きを示している。

以降、『室生犀星書目集成』（昭六一・十一、明治書院）も参照すると、十二月十一日に五刷三千部、同月二十二日に六刷四千部、翌三十一年二月十四日に七刷三千部、四月十八日に八刷三千部、六月二日に九刷二千部、三十二年二月十五日に十刷二千五百部の増刷の申入れがあった。そのたびに犀星は累計部数を計算し、「生涯の著作でこれほど増版したものは、はじめてである」（三十一年二月十三日）といった率直な思いを記す。また二月八日には「近くの本屋で『女ひと』を買はうとすると、売切れといふ、うちだけでも二三十冊売つたといふ。小さな本屋である」と記している。

この増刷に伴う印税収入に関する記録を日記から列挙すると、三十年十一月九日に十八万円（税込）、十二月九日に九万円（税込）、三十一年一月十八日に新潮文庫『室生犀星詩集』（昭二六・九初版）の印税と合わせて七万円余り、二月七日に六版の印税約六万一千円、四月八日に七刷の印税と『妙齡失はず』（昭三一・三、新潮社）の印税を合わせて十七万三千五百四十円（税引）、五月三十一日に『続随筆女ひと』（昭和三二・三、新潮社）の印税との合計で約九万円を得たとある。予想を超える事態だったためか、五刷が四刷と書き換えられ、他の著書と合わせた額のみにとどめて内訳が記されていないこともある。

その記述を手がかりに補足すると、前述のように十二月九日に「五千

部印税九万円税込」が届いたと記されているのは、谷田昌平の『回想戦後の文学』（昭六三・四、筑摩書房）に新潮社では印税は刊行後一月して支払われたとあることから、十月に出された再版三千部と三刷二千部との合計部数となる。かつ定価は百八十円なので、印税率は一割と考えられる。全て同率なら、十刷までの累計三万九千五百部の印税総額は七十一万一千円となる。

谷田は「犀星先生のこわさ、やさしさ」（『室生犀星全集月報』一四、昭四三・一、傍点原文）で、この随筆集の好評がもとで翌年『三人の女』の連載が始まったと述べている。『三人の女』は『週刊新潮』の昭和三十一年五月一日号から八月七日号まで連載された。同年二月二十二日の日記に新潮社の副社長佐藤亮一から連載小説十五回の執筆を依頼されたという。

「週刊新潮」は週刊誌ブームの最中、同年二月に出版社系初の週刊誌として創刊された。その目玉とされたのが、谷崎の『鴨東綺譚』だった。高橋呉郎『週刊誌風雲録』（平一八・一、文春新書）によれば、「週刊新潮」はこの連載小説のために一枚一万円という破格の原稿料を支払ったと噂されたという。しかし、同作はモデル問題のため三月二十五日号の第六回で中絶した。その代役として急遽依頼されたのが犀星だった。

日記に戻れば、依頼後、二月二十八日に谷田と打合せ、三月六日に再訪した彼に「尋ねてゐる男」と題名を伝えたという。その月の二十六日に「尋ねる男」二回分四十八枚の原稿が渡された。谷田は前

掲「回想戦後の文学」で、急な依頼にも関わらず「大谷崎」の後を受けて立つたことを犀星の若々しさととらえ、依頼から一月で見事に応えたとする。「週刊新潮」の編集長は『随筆女ひと』の連載を企画した斎藤十一であり、同書の好評が犀星に白羽の矢が立った理由だろうが、それだけでなく同社と犀星の長い付き合いが背景にある。さらに注17でふれた広津和郎の代理での執筆と同様に、不測の事態でも締切までに安定した出来映えの作品を期待できるという信頼によるところも大きかっただろう。

改題の時期は不明だが、その後も四月二日に第三回の原稿、同月十日に第四回分、十六日に第五回分と、ほぼ一週間で一回分の原稿を着実に書き上げる様を日記にたどることができる。また朝子の『父室生犀星』（昭四六・九、毎日新聞社）には、原稿の紛失など不慮の事態を考えた犀星は娘に写しを作らせたとあり、細心の注意が払われたことが窺える。「週刊新潮」同年四月八日号には『随筆 続女ひと』（昭三一・三、新潮社）の著者を訪ねる記事が写真入りで掲載され、まもなく連載が始まる『三人の女』の著者とその作風を紹介することになった。

四月十日にこの小説の最初の原稿料を受取った犀星は、その日の日記に「週刊新潮」「三人の女」稿料三回分税引十八万四千円うけとる。一枚三千元、いままで小説稿料では一枚三千元のこれが最高である」と記している。この一枚三千元は「新潮」から小説で得ていた額の二倍に相当する。これ以後、四月三十日に四回から六回までの原稿料と

して十八万三千五百円を受取り、五月二十三日にも十八万三千元が届けられたことが記されている。

このように犀星日記は、『随筆女ひと』の爆発的な売上と『三人の女』による小説の原稿料の最高額、という新潮社との結びつきから復活を果たす作家の姿を伝えて締め括られる。同年十一月十九日からは『杏子』の連載が「東京新聞」夕刊で始まり、人気はさらに不動のものとなる。犀星は二年後の三十三年、前掲した佐藤春夫との対談「文学者とは」で、震災後と当時の原稿料収入とを比較し、「今のぼくは二千元なり二千五百円なりとつて、そのほうがずつと楽だね」と発言している。大正十三年に作家の原稿料は高すぎると問題提起した佐藤⁽²⁵⁾が、「昔十五円もらつたときのほうがありがたかつた」というのとは、反対のとらえかただった。佐藤に「室生ブームの起っているブームの中心の人間が言うこと」と揶揄されても、「ブームの起らない前でもそうだ」として前言を翻すことはなかった。

これまで確かめてきたように、犀星は長年にわたって日記を通して、複数のジャンルにおける原稿料が描く軌跡をみつめてきた。「ブームの起らない前でもそうだ」という言葉にも、浅薄な印象で語られることを良しとせず、事実に基づき正確に語ろうとする思いが表れている。それはまた、晩年になって花形作家の位置に鮮やかに返り咲いたのは、単にブームに乗っただけではない、という出版界の激動の中を生き抜いてきた作家の自信と気迫に満ちた言葉でもあったのではないか。

というのも、犀星は原稿料こそ文士というものの根本に関わるもの

と考えていた。昭和二十四年の日記で印税の支払いの遅延をめぐって、「文士といふものには文人気質といふものが昔からあつたものだが、それが今どき支払ふ本屋にもその考へがあり、文士もまたすぐあきらめてかかるのである。これだけは日本流にいつてかなり美事な痼疾であるらしい」（四月一日）と記し、文士とは金銭には恬淡であるべきだという「文人気質」を出版界が利用し、作家もまたそれを安直に受け入れる風潮を皮肉る。こうした風潮にあくまで疑義を呈し、いやしきも筆一本で立つ文筆家は原稿料や印税の取り扱いを軽んじてはならないとするのが犀星の立場だった。

福永武彦は「文士の本懐」（『室生犀星全集月報』一四、昭三八・二）で、依頼原稿が掲載されず原稿も返却されず困っていた時に、犀星から「文士たるものが原稿を頼まれながら原稿料を貰へないといふことはあり得ない。載る載らないに拘らず、取るものは取るべきだ」と助言されたと回想している²⁶。交渉の上、三分の一に相当する額を受取ったが、その結果を聞いた犀星は「私ならさういふ時は全部取る」と言い切ったという。福永はこの厳しさこそまさに「文士の心得」だとする。犀星日記の記録はこうした厳しさから生まれている。

注

- 1 他に『庭を造る人』（昭二・六、改造社）収録の「震災日記」等のように犀星自身が発表した「日記」もある。

- 2 この言葉は荒正人が「漱石文学の物質的基礎」（『文芸読本夏目漱石』昭五〇・六、河出書房新社）で漱石文学を経済的観点から論じた際に用いた。犀星は『弄獅子』（昭二・一六、有光社）等で繰返し「売文家」と自己規定する。

- 4 『泥雀の歌』では大正二年とされているが、実際は大正四年のことだった（『室生犀星文学年譜』等参照）。

- 5 たとえば人力車に感激した作家に菊池寛がおり、推挙というケースには漱石山房で樗蔭の知遇を得た芥川龍之介、坪内逍遙の紹介で「貧しき人々の群」（大五九）を発表した宮本百合子、谷崎潤一郎の推薦で『李太白』（大七・七）を発表した佐藤春夫らがいる。

- 6 西村春江「父・滝田樗蔭の思い出」（『中央公論』昭六〇・七）によると、宇野千代は当時勤めていた料理店を訪れた樗蔭に原稿を直接渡して認められたという。

- 7 前掲『私の履歴書』

- 8 「文学者とは」「群像」昭三三・七。

- 9 「東京社より」「歳子」稿料百六十六円来る。（二月十五日）、「婦人之友より百円稿料来る」（三月五日）、「改造社より二十円稿料来る」（三月十九日）とある。順に『歳子の一族』（『婦人画報』同年四月号）の約三十六枚分、『母』（同年四月号）二十四枚分、随筆『春碧』（『女性改造』四月号）五枚分と考えられる。

- 11 昭和四年一月十三日受領の「アルト」からの原稿料は「変貌の時」「硝子戸の中」（同年九月号）、同年三月十六日受領の「若草」からの原稿料は「くろがねの扉」「恋愛する」（同年五月号）に対するものとそれぞれ推測される。

- 12 室生朝子編『室生犀星句集 魚眠洞全句』（昭五二・一、北国新聞社）や『室生犀星文学年譜』に未掲載。犀星の揮毫が福原路草の写真とともに同年五月号を飾っている。

- 13 「文章倶楽部」原稿料九枚参十六円落手、「若草」稿料八枚参十二円落

手」(昭和四年一月二十九日)、「中央公論」に随筆三十九枚をとどける。二百三十八円落手」(同年五月二日)、「新潮」から雑文稿料四十円送り来る」(昭和六年二月一日)、「改造」随筆稿料百二十一円五十銭入手」(同年四月十日)とある。順に「旅にて」(文章倶楽部昭四・二)、「俳道雑話」(「若草」昭四・三)、「時流と古代」(中央公論昭四・七)、「俠客風ないね子さん」(「新潮」昭六・三)、「チャップリン雑記」(「改造」昭六・五)をさす。

六円は「新潮」の原稿料で最高額だったが、犀星の「秋声考」(昭和文学全集月報一一、昭二八・四)によれば五円に引下げられたという。同随筆発表の約十五年前のこととある。編集の檜崎勤から「あなたの原稿料が最高で六円ですが、徳田さんにはお気の毒にも五円なんです。社でも一円づつ下げる意向があるので此際あなたも五円にしていただけないでせうか」と申入れられ、「秋声さんが五円なら喜んで五円に下げませう」と応じたという。檜崎は「犀星素描」(室生犀星全集月報三、昭三九・八)で、これは「新潮」の赤字を埋める策で、原稿料の一円の値下げは、犀星の位置にある作家にとっても容易ならなかったと当時の原稿料の一円の重みを強調する。

『値段の明治大正昭和風俗史』(昭和五六・一、朝日新聞社)による。

この頃の新聞小説『唇もさびしく』(西日本新聞昭二三・六・一八・一〇)は、一回三枚で千円だった(四月三十日等)。同年七月二十九日には『眼界』(別冊文芸春秋)昭二三・一一三十枚で一萬八千円を得る。一枚六百元となる。日記の上で最初に一枚千円を得たのは『では娘よ』(「改造」昭二四・六)と確認される。五十六枚で五萬六千円を受取った(同年五月十六日)。二十六年八月四日には同じ「改造」から「誰が屋根の下」四十二枚(昭二六・九)で五万円を得て、一枚千五百円で二割の税引の見当かと試算している。

昭和二十七年に「中央公論」にこの額を希望すると、千三百円と回答が届き、「嘗て最高の稿料を支払ったのも中央公論だった」と隔世の感を露わにしている(三月二十六日)。「新潮」には一枚千二百円との依

頼に千五百円を希望して受入れられ、『厭寿』三十枚(昭二八・二)で四萬五千元(税込)を得た(二十七年十二月二十八日)。「他がみなそれ以上になつてゐるから、純文雑誌でもさうしてもらはないとこまるのである」と記している。「文学界」にも当時同誌の最高額は千三百円だったのを同様の申入れをし、『貝殻川』(昭二八・四)四十四枚を五十枚と勘定して五萬三千九百元が支払われた(二十八年一月二十八日)。犀星はこの特別な配慮は、『餓人伝』(昭二六・五)『生身死身』(昭二七・七)等同誌に寄せた小説の完成度の高さによると自信をのぞかせている。「中央公論」でも『その二人のもの』(昭二八・四)で三十八枚分五萬七千元(税込)と同様の待遇がとられた。これは広津和郎の代理で三日間で書き上げたため、謝礼として別に一万円が贈られた(二十八年三月四日)。

「小説新潮」六萬四千元とどく、一枚二千円の割。小説稿料としては「婦人朝日」に次ぐものならん(五月二十二日)、「文芸春秋」(愛情の殺意)稿料七萬六千五百円、電報為替にてとどく。一枚二千三百円の割。(九月二十四日)とある。前者は『病室』(別冊小説新潮)昭二九・七、後者は『愛情の殺意』(「文芸春秋」昭二九・一二)を、また「婦人朝日」の原稿とあるのは『妙齡失はず』(昭二九・八・三〇・一二)をさす。「婦人朝日」の新延修三来訪、一年間連載小説依頼、稿料一枚二千五百円。承諾す(同年三月十日)と記され、七月六日に一回分六万円(税込)を受取つて以降、翌年十一月までは毎月原稿料を受取ったことが記録されている。

前者は「約束」(別冊文芸春秋)同年五月号、後者は「ボロ」(同年七月号)をさすと思われる。

二十七年四月十二日には「装苑」からも同じ一篇一万円で依頼を受けたとある。これは同誌同年七月号の「哀婢伝」のことと推定できる(室生犀星文学年譜)未掲載。

「東京日日新聞」昭和二十四年四月九日の記事を参照した。『回想の新生—ある戦後雑誌の軌跡—』(昭四八・九、「新生」復刻編集委

員会)によると、「新生」創刊時、原稿料の相場は一枚二、三円だったが、同誌では評論が一枚最低三十円、小説なら五十円、百円を支払うというので出版関係者の間に衝撃がはしり、二十二年頃には荷風や谷崎に一枚千円を支払ったと噂された。新生社や「新生」については同書の他、「東京日日新聞」昭和二十四年五月七日の記事等を参照した。

当時、「新潮」から犀星の小説に一枚千五百円が支払われていたことは、『紙幣の伝説』(昭三〇・四)三十枚が四万二千円(税抜、同年二月十八日)、『舌を噛み切った女』(昭三一・二)三十枚が四万五千円(同年十一月二十六日)といった事例から確かめられる。

二月が抜けているのは、「新潮」が四月号で創刊六百号を迎えたため。この記念号で『随筆女ひと』は休載し、犀星は『紙幣の伝説』と『輝かしい歴史』を寄稿した。

『三十分程』『女性改造』大正一三・六。

円地文子「軽井沢での縁」(「室生犀星全集月報」二、昭三九・五)で、「先生はよく私に原稿料の金額を話されて、新聞に書く場合などでもはじめにちゃんとそういうことは決めて置くべきだと教えて下さった。原稿を書くことは文学者の生命なのだから、それによつて得る報酬もおおざりに考えてはいけないというお考えだった」(傍点原文)と回想する。また同人誌時代より犀星に師事してきた葉山修平は「わが内なる室生犀星」(「室生犀星研究」一、昭六〇・二)で、犀星から「印税や原稿料がはつきりと口にでき、何のためらいもなく取定められて始めて一人前になれる」と教わったと述べている。

※ 本稿は平成十八(二十年)度科学研究費基盤研究(B)「出版機構の進化と原稿料についての総合的研究」(18320041)による成果の一部である。